

# 博士学位論文要約

## 「安慧の唯識説における認識論」

伊藤 康裕

### 本研究の目的と課題

本博士学位論文「安慧の唯識説における認識論」（以下、本研究）は、安慧（Sthiramati ca. 510-570）の唯識説について、その一端を考究するものである。

本研究においては、その分析の切り口として、主に認識に関わる議論に着目し、看過すべからざるいくつかの理論的特徴を引き出して、その思想史的意義を考察する。

主に考察の対象とした文献は、*Madhyāntavibhāga*（『中正と両極端との弁別』以下、MAV）とその世親釈論（*Madhyāntavibhāgabhāṣya* 以下、MAVBh）、ならびにその安慧復註（*Madhyāntavibhāgaṭīkā* 以下、MAVṬ）である。MAV は、その書名に示される通り、有と無との辺（*anta*）を離れた中道（*madhyamā pratipad*）を、瑜伽行唯識学派の学説において明らかにしようとするものである。そしてまた、大乘における根本概念である空性に対する瑜伽行唯識学派の解釈が論じられているという点において、重要な意味をもつ論書である。全体の構成は、帰敬偈と論の綱要を述べる序章に相当する部分と五つの章（漢訳は七章）からなり、そこで説かれる内容は唯識学派の教学に関する理論的側面から実践的・修道論的側面に至るまで多岐にわたっている。

本研究で中心的に扱う箇所は、MAV 第1章 *Lakṣaṇa-pariccheda* であり、そこにおいては瑜伽行派の新たな概念として、虚妄分別（*abhūtaparikalpa*）という概念が措定される。

「分別」のもっとも基本的な意味は主観（能取）と客観（所取）の分離あるいは分立である。そして、現実世界の凡夫が常識的にもっている通常の判断や認識は誤りであって真実にはそのような主客の分別は存在しない、という点が「虚妄」とであるとされる。

第1章では虚妄分別と空性との関係が論じられる中で、認識するものとされるもの、すなわち能取と所取、あるいは顕現といった、認識に関わる概念が重要な役割を果たしている。本研究では主にそのような箇所についての考察に主眼を置く。

安慧の唯識説の中で、なにゆえに認識論的な側面に着目するのかと言えば、安慧の教理理解は、日常的な認識が成立している状況について考察する場合に、それを唯識の立場からどのように説明をするのか、という点において、際だった特徴を示しているように見受けられるからである。本研究ではとくに、凡夫の日常的な認識に関して述べられる文脈の中で提示される諸問題を取りあげて分析する。

ところで、瑜伽行唯識学派の教理の柱のひとつである影像門の唯識（対象はすべて心中の影像である、あらゆる経験対象は心にほかならない）、すなわち「唯識無境」(= *vijñaptimātra*) という考え方の根本には禅定体験・瞑想経験があり、そこでは「日常的な認識」の正しさについてを根拠づけようとする動機がそもそも存在しないであろうことは、容易に想像できる。なんとなれば、影像門の唯識は、あらゆる認識対象・経験対象が実在しないという、禅定を通じた経験や実感などを基盤とする教義だからである。

それに対して、瑜伽行唯識学派の伝統にあっては、「唯識無境」を「外界の対象は如何なる意味でも認識の対象ではない」(□ *vijñaptimātra*) という、認識論的な視点から論証しようとする傾向もある。そのような傾向は、たとえば *Viṅśatikā Vijñaptimātratāsiddhi* (以下、Vś) における外界実在論者 (*bāhyārthavādin* 有外境論者) に対する批判や、陳那 (*Dignāga* ca. 480-540) や法称 (*Dharmakīrti* ca. 600-660) などいわゆる仏教論理学派の論師たちに顕著に見られるものであるが、それは安慧にも同様に看取される。しかも安慧には、Vś の世親よりさらに認識論的な視点を重視する傾向が見受けられ、そこには後代の法称などにとくに顕著である「正しい認識とは何か」という問題意識が存在する可能性も低くない。以上の点が、本研究において論証したいことがらのひとつであり、それゆえ考察の範囲を凡夫による認識・日常的な認識にしぼるものである。

また本研究では、MAV という文献の理解のされかたについて、その様相の変遷に関する問題も課題とした。MAV は瑜伽行唯識学派の中でも比較的初期のものであり、瑜伽行唯識学派の教義の基本的な枠組みを形成する論書のひとつである。したがってそこで説かれる教理もまだ基本的な段階にあるものであると言える。それに対して、安慧は比較的后代の論師であり、その時代には、それぞれの教理の理論体系がある程度整備されていたと予測される。ということは、教理の理解や解釈についても、安慧には、MAV と比較して相違もしくは発展したかたちが見られるということも十分に予測できる。したがって、瑜伽行唯識学派の思想的展開の解明を視野に入れつつ、そのような問題についても考察した。

さらには、後期の瑜伽行唯識派ないし仏教論理学派との比較考察も、課題として挙げられ得る。具体的には、安慧の主張する理論において、後代に構築整備される理論体系への橋渡し、もしくは後にみられる考え方や概念の萌芽が認められるか否か、という問題が課題として挙げられるべきであると考えられる。しかしながら、そのためには比較対象である仏教論理学派の見解についても立ち入った検討を加える必要があり、それは本研究での射程を超える。したがって、本研究の段階では、そのような問題意識を見据えた上で、いくつかの重要と思われる問題に限って考察を為した。

以上、課題となる領域をいくつか挙げてきたが、現時点では、安慧自身が体系的に自らの説を展開する論書は発見されていない以上、現時点で可能なことは、安慧によって展開された諸議論を複合的もしくは重層的に考察することによって、安慧に特徴的に見られる唯識説を提示することであろう。したがって本研究は、列挙した諸課題に対する信頼され得る解答を与え、それらを総合することによって安慧独自の唯識説の一端を提示することを基本的な目標とした。

## 考察の対象となる概念

以上のような課題のもと、本研究においては、唯識の教理を用いて日常的な認識を説示する際にどうしても必要となると思われる概念、換言すれば、それを除いては唯識学の立場からは日常的な認識を説明することが不可能となるような概念を考察の対象とした。具体的には、MAV<sub>†</sub>において説かれる以下の概念に対して考察を加えた。

①すべての（三界の）現象の基盤としての虚妄分別。MAVの教理は虚妄分別を中心とするため、認識について考察する場合にあっても、その基盤としての虚妄分別の概念を見落とすことはできない。

②日常的な認識における見るもの・見られるものにあたる二取。日常的認識においては、認識対象と認識主観を考察するのが通例である。そのことからして、この唯識説において日常的認識の成立がどのようなあり方であるのか、ということ考察するためには、二取の概念が必要となる。

③諸現象（対象）が立ち現れることを意味する顕現。唯識説においては、諸現象は主観も含めて、相あるいは像として顕れる。そのような相あるいは像を具体的に生み出すはたらきが顕現であり、このはたらきがなくてはそもそも認識が起こりえない。

④認識対象の確定要件である行相（ākāra）。ここでいう行相とは、対象の認識の成立を確定するものである。すなわち、あるAという認識が生じている状態において、その認識が、その他のBでもCでもなく、まさにAの認識であると限定する概念であり、認識の成立に決定的に関わるものである。

上記以外の概念を挙げることも可能であろうが、最低限必要な概念に限定するならば、以上の四つであろう。MAVにおいては上記の概念のどれが欠けても日常的な認識の成立の構造や機能を説示することが難しくなる。

したがって、これらの概念を考察することになるが、その際に導出される構成や論点

のつながりなどについて、以下に簡単に解説を加えたい。

### 「本論」各節の構成と概説

「本論」の2.1では、現実世界の認識について考察する。瑜伽行唯識学派は現実世界を所取能取（二取）として理解するが、MAVでは虚妄分別における二取として理解する。この虚妄分別と二取との関係について安慧は、虚妄分別の本来的なありかた、すなわち肯定されるべきありかたと、それとは別の否定されるべきありかた、すなわち、構想分別というはたらきを為して二取をつくるというありかたがある、と理解をしている。本節ではこの点について確認する。

2.2では、その構想分別という作用について具体的にどのように説かれているのかを分析する。そこにおいて、二取がどのようなものとして安慧に理解されているのかを、<sup>けせつ</sup>仮説 (upacāra 仮説) という概念も援用しつつ、確認する。

2.3では、認識作用の結果として何らかの像が立ち現れてくる一連のありかた (prati-*bhās*, pra-*khyā*, etc.)、すなわち顕現について、安慧の実際の用例を確認しつつ考察を加える。そこにおいて上来確認してきた虚妄分別と二取に対する安慧の理解が反映されている可能性を指摘する。

2.4では以上確認してきた内容を敷衍して導かれる、安慧が想定したであろう認識の成立過程の一モデルを提示する。これはいまだ作業仮説の段階にあり、推測の域を出ないものであるが、安慧の唯識説についての今後の研究のひとつの基点とすべく、暫定的なモデルを提示するものである。

2.5では、以上のような日常的な認識が成立した状態においては、安慧はその認識対象についてどのように理解しているのか、ということ考察する。具体的には、現実世界における立場での対象の認識に着目する。そこにおいては、対象の形象 (*ākāra*) という概念が鍵となり、それについての安慧以前の論師たちの見解を確認した上で、安慧の

見解について考察を為す。とくに、安慧より以前に、対象の形象の概念を用いて認識対象（所縁）の具備すべき二つの条件を定めた陳那の *Ālambanaparīkṣā*（『観所縁論』）を讀解し、そこでみられる所縁の定義を確認した上で、その定義の内容と安慧の論説との関わりを示唆する。

## 本研究の結論

「本論」の各節においてそれぞれの論題が考察されたが、そこで論じられた内容と小結をまとめて、以下に結論として示す。

2.1 では、安慧は *Madhyāntavibhāṣikā* (MAVṬ) において、虚妄分別（識）には否定されるべきありかたと肯定されるべきありかたとの、二つ異なったありかたを想定していることを確認した。否定されるべきありかたとは、虚妄分別は本来的に二取を全く離れている (*vinirmukta*)、と示されるように、二取というありかたが否定されているものである。そして肯定されるべきありかたとは、識（分別）は必ず顕現を有している、というものである。その虚妄分別（識）と二取との関係に着目すれば、それは広い意味での因果関係であると考えられている。すなわち、原因である虚妄分別に構想分別 (*parikalpa*) があり、そのはたらきの結果として二取が構想分別されて (*parikalpyate*) つくり出される、すなわち顕れるというものである。そして、そのように構想分別されて顕れる二取は否定されるべきものであり、識が有している顕現は肯定されるべきものである。したがって、二取も識が有している顕現も、両者ともに顕れもしくは像という点では異なるものの、否定されるべきものか肯定されるべきものか、というそのありかたにおいてまったく異なっている、ということを示した。

2.2 では、安慧は二取が生じるという状況に至らしめる構想分別というはたらきを、二取を把持する「取」 (*grāh*) というはたらきとも、認識における主客分離の「確定」 (*niścaya*) とも表現されること、さらには、存在しないにもかかわらず実在のごとくに

二取が生じることが、<sup>けせつ</sup> 仮説 (upacāra) として捉えられていることを確認した。そして、安慧が導入したそれらの概念を分析した結果、それらの作用は、肯定されるべきありかたにある顕れ (形象) をもとにして、二取を形成する作用を意味するものであると解釈され得る可能性を指摘した。また、安慧が想定する<sup>けせつ</sup> 仮説の成り立ちを分析すると、二取とは識の中にある形象を基体として概念的につくられたものである、という解釈を読み取ることができる。そこでは、実有として存在する識は、認識成立のもととなる形象を元々もっているものである、という安慧の基本的な理解が前提とされていると思われる。以上、虚妄分別に二つ異なったありかたが想定されている点や、構想分別に類する作用の用例から推し量ると、安慧においては、顕れ (形象) というひとつの概念において、否定されるべきものと肯定されるべきものという二つの側面が想定されている可能性が高いことが推認されよう。

さらにそのような推察を裏付ける一つの根拠になるものとして、2.3 では、安慧による「顕現」の用例を確認した。その結果、安慧がどのような観点から用語の使い分けをしているのかということについて、ひとつの予想を立てることができた。すなわち、少なくとも安慧においては、あるものに対して、それが自体としては存在しないにもかかわらず実在する、と構想分別する場合、すなわち、否定されるべき二取がすでに生じている場合は、その二取の顕現を prakhyāna という語で示すが、それに対して識が本来的に有している顕れについては、pratibhāsa もしくは ābhāsa という語で示す、という使い分けが為されている可能性を指摘した。pratibhāsa と ābhāsa の使い分けがあるのか否かについては、確定的なことは述べられないが、少なくとも、prakhyāna と bhāsa については、安慧においては区分されている可能性が高く、このような安慧の理解は、上来確認してきた虚妄分別と二取に対する安慧の理解、とくに、否定されるべき顕れと肯定されるべき顕れという理解が反映されている可能性を見過ごすことはできないと思われる。

2.4 では、以上のような見解を踏まえた上で、日常的な認識の成立に関する図式の想

定を試みた。そこではまず、安慧が理解する虚妄分別とは、本来的には無分別であることを指摘し、そのような虚妄分別が他の分別（＝識）によって妄分別（*‘kīp*）されることによりこの現実世界が成立する、換言すれば、認識作用が成立する、という安慧の解釈を確認した。それにより、安慧においては、主観客観というかたちで表象される現象は、虚妄分別が別の分別によって分別されるというかたちで顕れる、という段階的なステップが想定されている可能性があるという推察を為し得た。このような推察は、上来確認してきた安慧の認識論的な理解と、ある程度整合性のあるものである。そしてさらに、安慧によって規定された識のいくつかの性質を確認することにより、あくまで現段階で想定し得る作業仮説に過ぎないが、ひとつの暫定的な図式を示した。そこで考慮された識の性質とは、識は刹那刹那に生滅を繰り返す、時間的な推移の中にある動的な存在であるという性質と、識には境として顕現するというはたらき以外の作用は本来的にはない、という性質であって、それらの特徴をふまえることにより示し得た暫定的なモデルは、時間的先後関係による認識成立である。

2.5 では、そのように日常的な認識が成立した場合における、認識の対象について考察を為した。その結果、認識が確定するための要件、換言すれば、その対象を決定づけるものとして対象の形象（*ākāra*）が重要視されている、という点が、安慧のみならず、世親・陳那にも通底していることを確認した。対象の形象という概念が用いられる領域はやや異なっているものの、その重要性は三者に共通した見解であり、とくに陳那は、あるものが認識対象として存在するための、二つの条件のうちのひとつとして、「識にその形象（*ākāra*）が顕れること」をあたえている。一方で世親は、その概念を用いるものの、MAVI.3 偈の解釈では、かならずしも援用していないように見受けられる。それに対して安慧は積極的にそれを適用する。すなわち、安慧は、識が四種類に顕現する場合には、それぞれに、その顕現 A を限定・確定するものである、A の *ākāra* が必要であると理解していることが窺える。このような違いは、世親と安慧の唯識説の解釈の相



違に起因する可能性が高いものの、MAV‡ を作成するにあたって安慧が陳那の二条件の理論を考慮に入れていたという可能性も決して排除されないことを指摘した。さらにまた安慧は、その顕現した対象の存在性について述べる際に、「あるもの A としての顕現 (=識) が正しければ、すなわち、その顕現に対応する対象が存在するならば、その A の顕現は、akāra、かつ真実なる顕現である」という二つの条件を提示していることも確認した。

最後に、以上の内容により総合的に判断して得られる知見として、次のようなことが指摘できよう。すなわち安慧は、初期瑜伽行唯識学派の理論と比べて、より発展した段階にある認識論を用いていることが予想される。MAVBh と MAV‡ における教理の理解や解釈に関する相違の問題についても、少なくとも本研究で考察した範囲においては、MAV‡ には MAVBh よりもある程度整備された理論体系があった、と考えられるであろう。たとえば、MAV の第 1 偈における解釈で、MAVBh では用いられない識の顕現の理論を用いて解釈を為す点からもそのことが推認されよう。

また、後代の仏教論理学派において見られるような「正しい認識とは何か」という問題意識が比較的高い、もしくは、少なくともそのような問題意識の萌芽が見受けられる、ということも予想される。たとえば、MAVBh と MAV‡ とにおける、第 3 偈の解釈の明らかな相違などは、このことと無関係ではないと思われる。

以上の様な考察は、今後、瑜伽行唯識学派の思想的展開の解明を為す際の、ひとつの手がかりとなるのではなかろうか。

本研究において見てきたとおり、MAV‡ で説かれている教理事項は、認識論的に重要な意義を有している。しかし、その広範にわたる論説の中には、言うまでもなく他の教説（たとえば阿頼耶識説や三性説、もしくは入無相方便のような修行道論など）に深く関わっている議論にも多くの紙幅が費やされている。安慧の唯識説における認識論的側面に考察の対象と範囲を限ったため、そのような教理事項の解明は課題として残されて

いるが、本研究を通じて提示し得た、日常的な認識の成立場面に関わる安慧の唯識説を一つの拠点として、研究を深化させていきたいと考える。